



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Michael Kaiser, Politik und Kriegführung. Maxmilian von Bayern, Tilly und die Katholische Liga im DreiBigjährigen Krieg, Münster 1999, 582S.+X
Author(s)	山田, 良輔
Citation	西洋史論集, 5, 63-72
Issue Date	2002-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37447
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_63-72.pdf



Michael Kaiser, Politik und Kriegführung.
Maximilian von Bayern, Tilly und die
Katholische Liga im Dreißigjährigen Krieg,
Münster 1999, 582S.+X.

山田 良輔

はじめに

本書は、著者ミヒャエル・カイザーが一九九七年にケルン大学に博士論文(Dissertation)として提出したものである。このケルン大学のクーニッシュ(J.Kunisch)は近世における戦争の重要性を認識し、国制と軍制の研究を続けてきた、ドイツにおける軍制史研究の第一人者であり、ケルン大学はドイツにおける軍事史研究の拠点の一つである。そのクーニッシュの下で学んだ著者は、一九九五年以来、特に三十年戦争期に関係する数々の論文を発表している。今回取り上げるこの著書は、そのタイトル『政治と戦争指揮―三十年戦争におけるバイエルン大公マクシミリアン、ティリー、そしてリガ』が示すように、三十年戦争前期におけるバイエルン大公マクシミリアン一世と、リガに焦点が当てられている。三十年戦争期の研究であるとはいえ、この著書のテーマは、軍事史研究というより、むしろ、バイエルン領邦史研究にある。その際、著者は一六三一年九月一七日に行われた有名な

戦いであるブライトンフェルト会戦に注目する。この会戦は、よく知られているように、ティリー率いる皇帝軍がグスタフ・アドルフ率いるスウェーデン・ザクセン連合軍に敗北を喫した戦いである。この戦いについて、近年では、スウェーデン近世史家のロバーツ(M.Roberts)が一九五五年に「軍事革命」というテーゼを提出して以来、スウェーデン軍の採用した戦術の革新性が勝利の要因であり、それに比して、皇帝軍が旧来の戦術に固執し、柔軟性を欠いたために敗北したという説明がなされた。しかし、このような戦術的な変化からのみ、この会戦における皇帝軍の敗北を説明することについて、著者は次のように批判する。ブライトンフェルト会戦が行われた直後、親スウェーデン的なプロパガンダは、皇帝軍の敗北をマグデブルクの掠奪をはじめとする悪行の当然の報いとして説明した。戦術的な変化によって敗北の理由を説明することは、皇帝軍は道徳的に劣っていたから負けたのだとするこのような同時代人の説明パターン^①のヴァリアントにすぎない、と。そして、戦術の変化にだけ注目する説明パターンにおいては、ブライトンフェルト会戦という一戦が、政治的な事象から引き離されて考察されてきたということを著者は問題視しているのである。

そこで、著者はこの著書において、ブライトンフェルト会戦を政治的な流れの中に位置付けて考察しようとしている。その流れというのは、マクシミリアン一世治下のバイエルンにおいて始まりつつあった近代国家の形成への動きである。つまり、この著書の目的は、近世における絶対主義国家形成への動きの中で、いかにして国家が軍制を作り上げていくかという点を論ずることであると云える。この目的のた

めに、マクシミリアン一世治下のバイエルンを考察の対象に選んだのであろう。というのは、それは絶対的な諸侯国家の先駆とみなされるからである。君主にして最高軍司令官たるバイエルン大公マクシミリアン一世と、彼に仕えた軍司令官ティリーの関係を、リガを通して考察することで、絶対主義国家への途上における国制と軍制の関係を論じようとしているのである。

それでは、このあまりに有名な会戦をこのような流れに位置付け、新たな視点から改めて叙述するとき、どのような意義があるのであろうか。第一にバイエルン領邦史研究における意義が挙げられる。著者も述べているとおり、この著書はバイエルンの先行研究の基盤の上に成り立っている。これらの先行研究には、クラウス (A.Kraus) によるマクシミリアン一世のプロソポグラフィ⁽⁴⁾や、ウンケルマン (M.Junkelmann) によるティリーのプロソポグラフィ⁽⁵⁾、そして、ドリッガー (H.Dollinger) やハイデンロイター (R.Heydemeyer) によるマクシミリアン一世治世下のバイエルンにおける財務運営の研究や官庁の研究などがある⁽⁶⁾。このように個別の分野では、研究の蓄積が多いが、これらを総合的に扱った研究はなされていないのが実状である。それゆえ、これらの個別の研究を結び付け、マクシミリアン一世とティリーとの人的結合関係、そして、そのような両者の関係がバイエルンの政治とどのように関係していたかを、この時期のバイエルンにとって重要なファクターであったリガを通して総合的に叙述した点が、この著書の一つの意義であろう。第二の意義としては、三十年戦争研究における意義が挙げられる。著者は三十年戦争期のドイツについての軍制

の研究が欠落していることを強調している。この時期の軍制史研究はレトリッヒ (F.Redlich) やバーカー (Th.Barker) による研究のように⁽⁷⁾、アングロサクソン系研究者の研究であり、三十年戦争の時期を越えて行われているものが多い。これらの研究は確かに有用であるが、地域的にはヨーロッパ的枠組みを志向したものであり、ドイツにおける三十年戦争期の軍制を扱った研究としては充分ではない。また、時期についても、近世国家の形成途上における国制と軍制のありかたを問題とする著者にとって、これらの研究は対象とする時期が長すぎるのである。しかし、近年、三十年戦争期の軍制に注目し、この時期の政治と戦争指揮の相互関係を指摘する研究が現われ始めていると著者は述べる。本書もこの時期の政治と戦争指揮の関連を叙述するものである。政治と戦争指揮というテーマを扱う点において、ヒンツェ (O.Hinze) 以来の古典的な軍制史研究に連なるものと言えようが、研究の手薄な三十年戦争前期という時期を扱ったという点に本書の意義があると考えられる。

なお、本書の構成は以下のとおりである。

序章

第一章 政治・軍事的基盤

第二章 一六二〇年代におけるリガ

第三章 一六三一年の軍事行動・ブライテンフェルトへの道

第四章 ブライテンフェルト以後

総括と展望

本書は五百数十ページに上る大著であり、限られた紙幅と紹介者の能力ではそのすべてを紹介することは到底不可能である。著者は第一章で、絶対主義国家への途上にあるバイエルンという例において、軍制を国制の中に取り込もうとする君主の努力を描いている。それは軍務関係官庁を通じてなされていく。しかし、この段階において、そのような機関を通じて君主の管制が及んだのはティリーののみであり、軍全てを掌握するには到らなかったというのが第一章での著者の論点である。本稿では、この点について「一 マクシミリアンとティリー」で述べる。そして、第二章では、若干視点を換え、一六二〇年代に数々の成果をあげたリガがどのような特徴を有するものであったかを論じる。ここでは、第一章で述べられたマクシミリアンとティリーの関係を踏まえ、リガそのものが政治的に制約された存在であり、それが軍事にも大きく影響したことを述べている。しかしながら、そのような制約にもかかわらず、この時期にリガが軍事的にも成功を収めてきたことは否定し得ない事実であり、この枠内でマクシミリアンとティリーとの関係は十分に機能したことを著者は述べている。これは本稿の「二 一六二〇年代のリガ」で紹介する。続く第三章ではこの両者の関係がレーゲンスブルク選帝侯会議での「妥協」によって変化したことを強調し、ここにブライトンフェルト会戦敗北の原因を見出している。これについては「三 レーゲンスブルクの妥協」で詳述する。そして、第四章ではブライトンフェルト以後、リガが実質的に崩壊したことを述べている。本稿では、この著書の流れに従い、章立てに沿って、特に第二章、第三章を中心にその内容を紹介する。そして、本稿

の最後では第四章についてごく簡単に紹介し、全体を通して改めて本書の意義を考察する。

一 マクシミリアンとティリー

第一章では、一六二〇年代におけるリガの成功の基盤となっていたと著者が考えるバイエルン大公マクシミリアンと、軍司令官ティリーとの関係が論じられている。この時期におけるリガの軍事的成功にとって重要だった要因がティリーの存在であった。ティリーは軍人として数々の成功を収め、兵士達からの信望も厚く、同時代の軍司令官の中でも比類ない名声を誇っていた。そして、不敗の名将ティリーという存在がリガに軍事的名声を与えていたのである。すなわち、この名声を保ち、リガの軍事的優位を維持するためにも、ティリーという人材を自らの軍司令官として確保しておくことは、マクシミリアンにとって極めて重要な関心事であった。また、ティリーは軍事的な才覚以外にも、マクシミリアンにとって理想的な人物であった。というのも、彼は完全にマクシミリアンの意に沿って行動し、政治的野心を持たない純然たる軍人であったのである。この点、ティリーは「戦争企業家」と称される当時の軍人の多くとは異なったタイプの軍人であったことに著者は注目している。最高軍司令官であるマクシミリアンへの忠誠、命令への絶対的服従、政治領域への不干渉という勤務観をもつティリーに著者は近代的な意味での軍人のタイプを見ているように思われる。そして、このようなティリーをバイエルン大公に結び付けていたのは、

国制上の制度ではなく、あくまで人的な紐帯であったことを著者は強調する。これこそが著者の考える、近世国家における軍制の特徴であろう。

ティリーとマクシミリアンを結び付けていたのは、政治的中心であるミュンヘンから、戦場の只中にあるティリーの元に派遣された軍事査察官 (Kriegskommissare) であった。軍事査察官は戦場におけるマクシミリアンの代理として、ティリーにミュンヘンからの指令を伝えた。そして、彼はティリーからの通信と並んで、ミュンヘンに戦場の状況を報告した。いわば、戦場と政治を媒介する役割を果たしていたのである。そして、ティリーと軍事査察官の関係は極めて良好であり、両者は緊密な協働関係を持っていたと著者は述べる。一方、ティリー以外の将校達の例を挙げ、そこでは軍事査察官と司令官との関係は必ずしも順調ではなく、少なからず衝突があったと述べる。また、ヴァレンシュタインがティリーを「バイエルンの軍事査察官の奴隸」とみなしていたことを挙げ、軍事査察官という国制上の機関と軍事との関係については、ティリーがむしろ例外的なものであったと著者は考えている。マクシミリアンのコントロールはティリーを把握してはいたが、より下の指揮官達にまでは及ばなかったのである。つまり、著者は、近世国家において、軍人と国家との結びつきを同心円状にグラデーションを描くものとして考えている。バイエルンで言えばその核には最高軍司令官にして君主たるバイエルン大公があり、その周りに軍司令官であるティリーがおり、さらにその周りには大佐や連隊長など、下級将校や兵士がいるのである。ここで、著者の考えをまとめれば、

近世国家における軍制と国制の特徴として次の点が挙げられよう。つまり、軍事査察官など、軍を管轄する官庁は登場してくるものの、君主の支配権が隅々にまで行き渡らず、軍と国家との結びつきの間に濃淡があるという点である。しかし、だからといって、このような軍制を不備のあるものとみなし、考察の対象からはずしてしまうことは著者の戒めるところであり、むしろ、このようなシステムが一七世紀の戦争において機能していたということ自体に、近世の国家形成プロセスのファクターとして、軍制が有していた意味を著者は見出していると言える。

二 一六二〇年代のリガ

上記で見たように、卓越した軍司令官ティリーを意のままにできたことが、一六二〇年代のリガの成功にとって重要な要素であった。第二章では、具体的に、この時期のリガそのものが有していた特徴が述べられている。それに先立って、簡単なリガの概略を述べておく。リガは一六〇九年にバイエルン大公マクシミリアン一世によって設立された、カトリックの帝国等族による同盟である。聖界選帝侯やヴェルツブルク司教、バンベルク司教など多くの聖界諸侯も参加している。この同盟結成の背景としては、その前年にプファルツ選帝侯フリードリヒ五世が新教徒の同盟であるウニオンを結成したことに対抗するという宗派的な動機がある。そして、それ以上に、反ハプスブルクの性格もこの同盟には付け加わっている。バイエルン大公はカトリック

の帝国等族の頂点に立ち、ハプスブルク家の優位に立ち向かうとしていたと著者は述べている。皇帝サイドは、リガを一度解散させるが、三十年戦争勃発を契機に一六一九年にリガは再結成される。こうして再結成されたリガはティリーの軍事行動にも大きな影響を与えた。著者はリガの特徴を大きく三点に絞って述べている。

第一の特徴が「防衛」である。防衛概念はリガの基盤となるものであった。リガはその創立定款において、同盟に参加した等族の防衛を重要な目的としている。これは空言葉に聞こえるかもしれないが、実際のところ、同盟等族を結び付ける上で防衛は重要なファクターであった。同盟に加盟する帝国等族にとって、地理的な環境からも、防衛は共通の関心事であり、この共通点が、大小の等族をリガに結集させることになったと著者は述べている。この防衛という原則はリガの戦争指揮にも大きな影響を与えている。リガの防衛思考は最終的には形を変えて、同盟加盟等族の地域から戦争を遠ざけて行うことを指向するようになる。これは戦争を遂行する上で財政上の問題からも、もっともなことであった。というのも、リガ独自の軍隊はリガ等族からの分担金で賄われていたものであり、戦場がリガ等族の領邦である場合、そのリガ等族は宿営の提供や、軍隊による領地の荒廃により、分担金支払いに耐えられなくなったからである。戦場で実際に軍を指揮するティリーもまた、この防衛概念を念頭に入れて行動していた。つまり、戦場における軍の行動は、この防衛原則に著しく制約されていたのである。リガ軍はリガ加盟等族の防衛のためにある以上、その部隊は防衛のために配備され、ティリーは敵を攻撃するために兵力を意のままに

することが難しい状況にあったと著者は述べている。

第二の特徴として「中立」が挙げられている。中立は防衛と同様に、リガにとって規範的な原則であり、それは戦争の拡大を阻止するものだった。一六二〇年代において、中立はリガの政治的構想における強固な構成要素であった。具体的に中立が重要であったのは、ハプスブルク家とオランダとの対立にリガが軍事的に巻き込まれないようにするためであった。オランダに対しては中立を保とうとするリガの努力とは裏腹に、皇帝はリガの軍勢力を自らに有利になるよう動員することを模索していた。この動きの中で、リガ軍はケルン選帝侯領の防衛のために動員され、オランダの勢力圏にリガの軍が駐留するという事態に到った。これは皇帝の狙ったとおりにリガが動員されたことをうかがわせる。しかし、奇妙に聞こえるかもしれないが、これはリガとオランダとの表立っての軍事衝突には到らず、両者にとっての中立放棄にはならなかった。というのは、リガもオランダも互いに戦争を行うことを避けていたこともあるが、中立という概念がはっきりと法的概念として定義されておらず、この曖昧さが、行動の余地を与え、軍事的なエスカレートに到ることを阻止したからである。しかしながら、オランダとの緊張は続き、それはリガの軍を帝国北西部に縛り付けることとなった。

そして最後に、リガを規定していた概念が「執行」である。執行の概念こそ、リガが軍事的干渉を行うための法的根拠として重要であった。さもないければ、加盟等族の防衛を目的として集められたリガ軍が、どうしてもるか帝国北部にまで進軍しえたであろうか。執行概念は、

リガが行う軍事行動は皇帝からの執行委任として理解されるという概念である。これによってマクシミリアンは、直接的な政治的責任から戦争指揮については解放されることができた。さらに、大公自らの政治的目的を達成するための軍事行動もこの執行概念の裏に隠すことができたと著者は述べている。この概念に基づいて、リガ軍は一六一九年からベーメン戦争に動員された。さらに、リガに対する皇帝からの委任はリガ軍がプファルツ、さらにニーダーザクセンに進撃する正当性をも与え、リガに政治的、軍事的な行動の余地を与えることとなる。この皇帝からの委任という概念によって、リガとバイエルン大公は特別な政治的意義を有したのである。しかし、皇帝からの委任はリガ軍を皇帝軍として動かすことになった。ここに、リガ軍が二重化されるという問題も生じた。つまり、リガ軍はリガと皇帝双方の戦争目的を遂行せねばならないという状態に陥ることになる。リガと皇帝の利害が一致する場合にはかまわないが、両者の利害が一致しない場合、すなわち、バイエルン大公と皇帝との間に隙が生じた場合には、リガは大きな制約を受けることになる。そして、その対立はヴァレンシュタインの登場により現実のものとなる。

著者の強調する「防衛」、「中立」、「執行」という三つのリガの特徴は、ティリーの戦争指揮にも影響を与えてはいたが、ティリーとマクシミリアンとの緊密な関係がこの枠内で十分に成功をもたらしていたと著者は考えている。それは、この時期に行われた軍事行動を見ればわかることであり、ティリー率いるリガ軍は概ね勝利を収めている。プファルツからバイエルンへの選帝侯位移籍もその成果の一つである。

う。それがなぜ一六三二年には大きな敗北につながってしまったのか。その理由は次章で考察するレーゲンスブルク選帝侯会議での決定にあると著者は見ている。つまり、この時期の成功の大きな要因であったマクシミリアンとティリーとの関係を根本的に変えることになったのが、この選帝侯会議での決定であった。そして、ここでは皇帝との関係が大きな問題となるのである。

三 レーゲンスブルクの「妥協」

本書の第三章ではレーゲンスブルク選帝侯会議と、会議後からブライトンフェルト会戦までの数ヶ月をきわめて詳細に描いている。著者がレーゲンスブルク選帝侯会議での決定を強調しているので、ここでは特に第三章の前半に注目して紹介することにする。

上述したように、リガの軍事行動にとって皇帝からの執行委任というのは大きな要因であった。しかし、ヴァレンシュタインが巨大な軍を徴募したことにより、皇帝は自身の軍を有することになり、皇帝からの委任を受けて行動してきたリガ軍の存在意義そのものが揺るがされることとなったのである。つまり、皇帝はバックにバイエルン大公の野心が見え隠れするリガ軍を、軍事的に二次的な役割しか持ちえないような立場に追い落とそうとしたのである。これに対して、当然マクシミリアンは抵抗した。このような流れの中で両者の対決の舞台となったのが一六三〇年に開催されたレーゲンスブルク選帝侯会議である。

ここで著者は特に、皇帝とバイエルン選帝侯との政治的な対立を、皇帝軍の総司令官職（Generalat）の問題を通じて説明している。レーゲンスブルク選帝侯会議ではローマ王選出問題や復旧勅令の問題など、様々な問題が議論されたが、その中に皇帝軍総司令官を務めていたヴァレンシュタインの解任問題があった。特に解任後の総司令官職について議論は紛糾した。選帝侯サイドからは、バイエルン選帝侯自身が旧ヴァレンシュタイン軍の総司令官職につくことが提案される。一方皇帝サイドは、バイエルン大公が旧ヴァレンシュタイン軍の総司令官になるのであれば、リガを解体し旧ヴァレンシュタイン軍の下に編入するべきことを要請した。これにより、リガは今や解体の危機に立たされることになった。両者の対立は解決せず、両サイドにとっての妥協的解決が図られたと著者は述べる。マクシミリアンは旧ヴァレンシュタイン軍に対する指揮権を断念せざるをえなかったが、リガの解体は免れたのである。そして、ヴァレンシュタインが徴募した軍の指揮権はフェルディナント自身の手に戻すところとなった。しかし、皇帝自身が戦場に出て兵を親率することが事実上不可能である以上、現場でその軍を指揮する将軍が必要であった。そして、ティリーに白羽の矢が立ったのである。こうしてバイエルン大公と皇帝の間に「妥協」が成立した。これが、著者が強調するところの「レーゲンスブルクの妥協」である。

この「妥協」の結果としてティリーはリガ軍の「司令官」であり、皇帝軍の「司令官」という二重の司令官職を帯びることになったのである。このティリーの「二重化」に著者は一六二〇年代の成功の基盤

であったマクシミリアンとティリーとの関係の変化を見ている。バイエルン大公は、独占的にこの信頼のおける将軍に命令する権利を喪失したのであり、バイエルン大公にとっては決して都合なものではなかった。これこそ、ブライトンフェルト会戦での敗北の大きな原因の一つであり、レーゲンスブルクでの政治的な妥協が戦争指揮に影響を与えた例証であると著者は強調している。このレーゲンスブルクにおいて成立した「妥協」は純軍事的に見て決定的な戦略的不利を生み出すことになった。それは、ティリーへの上級命令権が定められなかったという点である。そのため、バイエルン大公と皇帝の双方から異なる命令が来た場合、ティリーは、大公と皇帝両者の要請を満たし得るような妥協的な戦術を取らざるを得なかった。スウェーデン王グスタフ・アドルフの帝国への侵入に際し、それがよく現われていると著者は述べている。上述のように、リガ軍はリガに加盟する等族の防衛を目的とする以上、バイエルン大公はこれらの等族の防衛を第一にティリーに要求した。一方、皇帝はスウェーデン軍の進軍に備え、シュレージェンなど、自らの領地の防衛をティリーに要求する。ティリーは両者の要求を満たすために兵を分散して配置する必要があり、そのように分散した兵を指揮すること自体、大変な負担であった。著者は、ブライトンフェルト会戦での敗北の一端も、分散配置された兵力を統合することができないままに会戦に引きずり込まれたことにあったという解釈をしている。政治的決定が軍事的に優位に立てる戦術を採用することを妨げた一例であろう。また、ティリーをザクセンに進撃させる命令について、皇帝とバイエルン大公との間で調整がつかず、結局

ティリーは選帝侯軍とスウェーデン軍の合流を阻止することができなかった。この結果、ブライトンフェルトでは数の上でもスウェーデン軍が戦術的優位に立った。これもブライトンフェルトでの敗北の要因だったと著者は見ているのである。このような著者の視点は、政治が軍事に大きく優先し、軍事行動はあくまで政治に緊縛されているということをより具体的な例を以って示している。皇帝とリガとの対立が現実の戦争指揮を妨げた、と著者も明言しているのである。そして、リガの成功が完全に制度化されていない人的結合関係に依拠していた以上、このような政治的決定に大きく影響されたことが、まさにこの時期の軍制の限界であったと言える。

おわりに

以上、第一章から第三章の著者の論点を概観してきた。ここでは本稿のまとめとして、初めに第四章を紹介した後、著者の結論を紹介し、最後に本著書の意義について改めて考察する。

第四章で著者は、ブライトンフェルト会戦以後のリガが終焉を迎えたことを述べている。ブライトンフェルトの敗北は、ティリーの軍事的名声を失墜させ、ティリー自身の自信をも打ち砕いたと著者は述べる。これにより、リガは軍事的信頼を失い、バイエルン大公の庇護の下にあった帝国等族たちは皇帝に頼っていくこととなり、バイエルン大公が帝国において皇帝に対抗する勢力になることが阻害されたという。はからずも、リガは軍事力によって皇帝を支援し、自らの敗北に

よって皇帝の力を強めるという逆説的な結果をもたらしたと著者は考えている。しかし、バイエルン大公の帝国における重要性には変わりなく、また、プファルツの選帝侯位移籍のように、リガがバイエルン大公の政治的目的を達成するに十分な手段であったことも疑いない。しかしながら、ブライトンフェルトの敗北は、ティリーの軍司令官職を二重化した戦争指揮の構造が失敗に終わったことを示すものであった。著者はブライトンフェルト後に行われたインゴルシュタットでのリガ会議を挙げ、リガに参加していた等族がリガを次々に見限っていった様子を描いている。一六二〇年代の成功により、バイエルン大公の帝国政策に大きな影響を与えたリガは、この時点において機能的に終焉を迎えたのであった。このように、ブライトンフェルトをリガの終焉と見るのが第四章での著者の視点である。

著者がこの著書を通じて行ったことは、ブライトンフェルトの敗北を改めて政治史の流れに位置付けたことであるが、その目的は冒頭に述べたように、近世の、絶対主義の途上にある国家と軍制との関係を論ずることであった。このように見てくるとき、ブライトンフェルトの敗北は、形成途上にあった近世国家が、軍制を国家に統合するに際しての一つの苦い経験であったことを意味している。つまり、リガに軍事的成功をもたらしていたのは、国制上の制度より、むしろ、マクシミリアン一世とティリーという人的関係であった。それがこの段階での軍制の特徴であり、また限界であったと言える。そのような人的関係に基づいたシステムがブライトンフェルトで破綻し、その後も、自らの作り上げてきたラント防衛制度が三十年戦争の中で殆ど機能し

得なかったことを目の当たりにしたマクシミリアンが、軍制よりもむしろ行政機関の設立に力を入れていくことになったと著者は結論付けている。つまり、マクシミリアンは三十年戦争の経験から軍制の創設を積極的に促進することはなかった。著者はマクシミリアンのみならず、他の諸侯も、ヴェストファーレンの和約締結後、自らの軍を解雇したことを述べている。これは、常備軍の考えが徹底されるまで尚しばらく続いた傾向であった。すなわち、三十年戦争における軍事的な経験と、一七世紀末葉における常備軍の創設との間には直接的な継続性は見出せず、そこには断絶がある、という点が著者の最終的な結論である。

このような著者の結論を受け、今後はバイエルン以外の領邦、あるいは帝国全体に注目し、近代国家形成期における軍制が国制とどのような関係にあったのかを考察する必要があるであろう。そして、著者の言うように、一七世紀前半の軍制と絶対主義における軍制との間に連続性を見出せないのかということについても研究を進めていくべきである。日本において、三十年戦争期の軍制の研究はまだ進展していないのが実状であるが、この時期のバイエルンの軍制を扱った研究として、とりわけ選抜民兵制と傭兵制の二元的兵制に注目した神寶秀夫氏の優れた研究がある。⁽⁸⁾このような研究状況の中で、本著書を紹介することは、今後、絶対主義以前の国家における国制と軍制との関係を考察する上で、一つの考え方を提供するものではないだろうか。

註

- (1) 阪口修平「近世ドイツ軍事史研究の現況」『史学雑誌』第一一〇編第六号(二〇〇一年)、八八頁。
- (2) 著者の論文のうち、本書に関するものは以下のものがある。M. Kaiser, *Bayerns Griff nach Brandenburg. Ein Gutachten für Kurfürst Maximilian I. von Bayern*, in: *Forschungen zur Brandenburgischen und Preussischen Geschichte*, Neue Folge 5 (1995), S. 1-29; ders. *Der Krieg in der "Wetterecke der europäischen Politik": Kurköln und die Kriegführung der Liga unter dem Feldherrn Tilly (1621-1630)*, demnächst in: *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins* (2000), S. 29-66. この他にも著者の論文は多いが、ケルン大学のホームページにその一覧がある。
- (3) M. Roberts, *The Military Revolution 1560-1660*, in: *Id. Essays in Swedish History*, p.195-225, London 1967. 最近の軍事革命論研究の動向については、大久保桂子「ヨーロッパ軍事革命論の射程」『思想』八八一号(一九九七年)を参照。
- (4) A. Kraus, *Maximilian I. von Bayerns Großer Kurfürst*, Graz, Wien, Köln, Regensburg 1990.
- (5) M. Junkelmann, *Feldherr Maximilians. Johann Tserclaes Graf von Tilly*, in: H. Glaser (Hg.), *Wittelsbach und Bayern. Um Glauben und Reich. Kurfürst Maximilian I.*, München 1980, Bd. II 1.
- (6) H. Dollinger, *Studien zur Finanzreform Maximilians I. von Bayern in den Jahren 1598-1618. Ein Beitrag zur Geschichte des Frühabsolutismus* (Schriftenreihe der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaft. 8.), Göttingen 1968; R. Hydemeuter, *Die Behördenreform Maximilians I.* In: H. Glaser (Hg.), a. a. O.
- (7) F. Redlich, *The German Military Enterprise and his Work Force. A Study in European Economic and Social History* (Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Beiheft 47/48), 2Bde. Wiesbaden 1964/65; Th. Barker, *The Military Intellectual and Battle. Ramond Montenucci*

- and the Thirty Years War, Albany 1975.*
(8) 神寶秀夫『近世ドイツ絶対主義の構造』(創文社、一九九四年)、三八三頁から四五一頁。